

討論

決算審査特別委員会(9月14日)および定例会最終日(9月27日)において、第63号議案に対する討論が行われました。定例会最終日に行われた討論の主な内容は、次のとおりです。

◎第63号議案・令和2年度白石市一般会計及び特別会計歳入歳出決算の認定について

反対 平間 知一

反対の立場から、大きく2つの点について指摘したい。

1点目、本市の財政について、令和2年度一般会計決算は、緊急対策として国庫支出金などが大幅な増加となった一方、財源確保の厳しさを示す依存財源に頼らざるを得ない姿も顕著に表れている。

そのようなか、自治体が通常水準の行政サービスを提供するために必要な一般財源を示す標準財政規模は、過去3年を

見ても安定的規模を維持しており、財政力指数では宮城県内市町村において、中の上にランクアップされている状況である。

これらのことから、他の分析比率を総合的に見ても、本市財政は厳しい状況を垣間見ることはできない。

特に令和2年度は、市民の安定的生活基盤の確保に向けた集大成ともいえる数字であったと言える。

2点目、市民の命を守るための配慮、つまり白石市外二町組合、公立刈田総合病院に対し、過度な財源不足をあり、本来すべき努力義務を怠った結果、市民が享受すべき機会までも半減させている点は評価できない。

白石市外二町組合への出資金・補助金・負担金の繰り出しは、令和2年3月、市長が指定管理者制度による公設民営化案を表明した影響から、刈田病院の経営状況、医療提供体制は重点支援区域申請時の想定とは大きく乖離している。

令和2年度は市から病院への繰出金の減少により、病院は

現金収支で黒字予算を組むことができなかった。

総務省の公立病院への繰り出し基準を見ると、刈田病院は10〜11億円が基準であるが、令和元年度以降は大幅に下回っている。

しかも、新型コロナウイルス感染症による医業収益の減少もあり、大幅な赤字決算が見込まれ、刈田病院の運営はますます厳しい状況となった。

刈田病院は、新型コロナウイルス感染症、医師・看護師の減少により、1カ月当たり約1億円の赤字を積み重ねている状況である。

この財源不足には、国の新型コロナウイルス感染症特別減収対策企業債12億5千万円をもつて補填しても、病院全体では資金不足比率調整のため3億2千万円が必要となり、今回も補正予算に計上された。

しかし、コロナ減収企業債の12億5千万円は起債のため、資金ショート回避には有効ではあるが、結果として刈田病院の借金は膨らむばかりである。

そこで、令和元年度の資金不足調整額は、1市2町から病院へ貸付金として、一時借入金との割合で負担したが、令和2年度は繰出金として、本来の割合で負担をしている。なぜだったのか疑問が残る。

令和元年度・2年度とも、当初予算では決算時に資金不足調整額が生じていることから、繰り出し基準の見直しが必要であると考える。

職員全員で収益を上げようと努めても、巨額の債務を抱えざるを得ない現状は、職員の疲弊と、この地域の医療の疲弊を招く結果となった。

このことから、新型コロナウイルス感染症まん延中の状況下で、市民の命を守る姿勢が決算書には垣間見ることができない。

市民の健康と命を守るために、地域医療の要としての刈田病院の経営が成り立つことが最優先ではないだろうか。以上の理由から、第63号議案に反対である。

限られた予算の中、優先順位をつけ、事業の選択と集中を行い、

賛成 菊地 忠久

令和2年度は新型コロナウイルス感染症という、これまで経験したことがなく、未だ出口の見えない中、市政運営に取り組んできた苦労は察して余りある。

歳入歳出全体を見れば、一般会計の実質単年度収支は1億3千445万7千円と2年連続の黒字、特別会計では3特別会計全体で、実質収支額は2億31万5千円の黒字となった。

一般会計、3特別会計ともに、黒字計上としたことは、おおむね健全な財政運営がなされたと判断できる。しかしながら、そのことによって本市の財政に余裕があると言えるわけではない。

少子高齢化と人口減少が進出し、地域経済も縮小していく中、老朽化する公共施設の維持・管理・整理、防災対策、教育、福祉など、必要な施策を挙げれば、予算がいくらあっても足りない。

限られた予算の中、優先順位をつけ、事業の選択と集中を行い、